

# 逆軍の旗

## 映画文学人生論

藤沢周平 (1927-1997)

『逆軍の旗』1976 「青樹社」

『半生の記』(1994) 「文藝春秋社」

『周平独言』 (1959) 「講談社」

参考：高橋敏夫 『藤沢周平 負を生きる物語』(2002)

時は今あめが下しる五月哉

『逆軍の旗』の主人公は本能寺を襲い、主君織田信長を殺した反逆者明智光秀である。日本史で評判のわるい人物の一人だが、藤沢周平はなぜ光秀を小説の主人公に選んだのだろうか。

自伝の『半世紀』によれば、「要するに私はドロップアウトした人間です」と編集者にもらしている。そんなはぐれもの意識が光秀への共感、同情にあらわれているのではないかと思う。

愛宕神社西ノ坊、威徳院で興行した連歌は、始まるのが遅かったために、深更に一巡して休み、仮寝のあと明け方からそのあとを続けて、辰の刻（午前八時）に九吟百韻を巻き終わった。

発句は光秀の、

「時は今あめが下しる五月哉」

脇は威徳院の行祐が、

「水上まさる庭の夏山」

とつけた。第三句を起こそうとしながら、里村紹巴に一瞬ためらいがあった。第三句は行祐の付句を受けながら、他に転じなければならぬ。

だが、光秀の発句を強すぎると思った。光秀は志を述べたのではないか。そう解釈すると、発句の張りつめた調子が、ごく自然に腑に落ちたが、同時に、凶凶（まがまが）しい戦慄が胸をかすつて走るのを感じた。とっさに、紹巴は発句の強い性格を打ち消すしかないと思った。

「花落つる流れの末をせきとめて」



## 逆軍の旗

—— 高齢者文学人生論

これが紹巴のつけた第三句である。それは光秀を諫（いさ）めるというよりは、光秀の決意に同意しなかったという意思表示のつもりだった。発句、脇句と続いた勢いを、そこで食い止めることで、紹巴は光秀が謀叛にふみきるかもしれないという噂が含む真実から眼をそむけた。

連歌の教養がない者にはわけがわからないが、わかる人にはわかる。もちろん光秀にはわかったが、本能寺の変後に紹巴が豊臣秀吉から疑われたものの難をのがれたところをみると、百姓あがりの秀吉にもわかつたらしい。

作者の藤沢周平は山形県の農家の出身だが、結核で入院中に俳誌『海坂』に投句して俳句の修業をし、光秀や紹巴が巻いた連歌百韻を小説の材料にするだけの教養を身につけた。

しかし、『逆軍の旗』は、戦国武将の中で、とりあえずもつとも興味を惹かれる明智光秀を書いたものだが、書き終わって、かえって光秀という人物の謎が深まった気がしたと藤沢はいう。こういうところが、歴史小説（藤沢によれば、歴史的事実とされていることを材料に、あるいは下敷にした小説）、を小説のテーマとしての歴史に私をむかわせる理由のひとつだという。

歴史とは奥が深いものだ。歴史認識を共有することの難しさをあらためて感じた。

軒を出て犬寒月に照らされる

藤沢周平